

國民科指導の精神 (四)

文部省圖書監修官 竹 下 直 之

九

『ヨミカタ』の卷一を開いてごらんになります。最初は文字なしで、校庭で子どもたちがラジオ體操をしてゐる繪に始まります。校庭には櫻の花が爛漫と咲いてゐます。ここで先生は入學のよろこびさか、春の樂しささか、花の美しさ、元氣でほがらかなラジオ體操について話をさせ、

最後に體操の號令「二三四五六七八」に導いて、特に「二三四」を焦點として發音の訓練をするのであります。「イチ」の「イ」を捕へて、「イ」をいふ母音訓練をするわけです。次の頁にある校庭の遊戯の繪でも同様であつて、樂しい行進の「ウレシイナ」の「ウ」をまつて母音訓練をする。「オモシロイナ」、「ウレシイナ」、「エライナ」をいふ歡聲的な叫び聲、これを大きく、正しく、ゆつくりと發音させるのであります。

かうして導いてから始めて、文字に入るのであります。最初の「アカイ、アカイ、アカイ、アサヒ、アサヒ」では、文字を教

へるほかにまた、母音「ア」の基礎練習をするごにも、前課の「エライナ」を關聯して重母音「アイ」を含む「カイ」の練習をさせるのであります。「ヒ」を地方によつて「フ」を混同したり、或は「シ」「フィ」を訛るごころがありますが、これらを訓練するごによつて、次第に改めさせて行くごになります。

言語訓練、すなはち一の躰が、如何に兒童自身のごごに即して指導されるかは、

「コマイヌサン

ア

コマイヌサン

ウン」

ごいふやうなこの教材からも、想像せられ得る處であります。この教材は、子どもがお宮におまゐりして、社頭の狗犬をみて「コマイヌサン」を呼びかけた、ご考へてごらん下さい。するご口を開いてゐる方の狗犬は、「ア」を答へ

口を開けてゐる方の狗犬は「ウン」に答へるであります。子ごもたちは、さう想像し得るのであります。この兒童心理に即して「ア」「ウン」をくり上げてゐる。「ヒノマルノハタ」にしても、「ヘイタイサン」にしても、「アヒル」にしても、言語訓練は發音と文字とつねに組んで進むのであります。さうして發音、文字、ないし語句語法といふ言語訓練から、歩み入つた「ヨミカタ」の練成は、次第に躰の部面に進みます。例へば、二十二頁に見える

「オハヤウゴザイマス。

イタダキマス。

イツテマキリマス。」

に始まつて、六十頁の「メダカサン、メダカサン」に至るまで、この邊は「ヨイコドモ」の教材としても取扱はれ得るやうな、躰のこまばが豊富に準備されてゐます。

「ホンダイサムサン。ハイ。

ワタナベマサチサン。ハイ。

スズキハナコサン。ハイ。

ハヤシハルエサン。ハイ。」

こいふ教材は、見方を變へますと、禮法指導となるやうな、元氣のよい返事の訓練でもあります。かかるものが、すなはちこまばの躰に關する教材として提出されてゐる。また、

「センセイ、サヤウナラ

オカアサン、タダイマ」

こいふのは、子ごもが歸宅するまでの躰であつて、歸宅後のイサムサンが使ひに行くところは、孝行の實踐でありませうし、また幼い子ごもにまつての禮法こいふものが自然に指導されるこまになるのであります。

更に二十一課の「デンワソビ、オキヤクソビ」のころでは、この兒童の遊戯生活を通して、興味を覚えさせながら、挨拶や躰のこまばを兒童の身につけさせようとするところがある。すなはち無邪氣に電話遊びをしたり、お客遊びをしたりしてゐるうちに、電話特有の名乗り合がわかつたり、自然に敬語が使へるやうになつたり、返事の仕方がわかつたり、訪問の際のお互の挨拶ができるやうになつたりするのであります。

このやうに「ヨイコドモ」の緊密な連絡を以てして、しつけ、またこまばの訓練をして行く。醇正な國語について指導するのであります。子ごもが自分の生活のなから、だんだん大人の世界へ近づいて成長するすがたが、「ヨミカタ」のなかに看取せられるのであります。その進み方は飽くまで、實踐的な躰であります。文字を指導し、言葉を教へ、發表力や理會力を高めてゆく教育、すべてが又しつけるこまであります。從來ただ文字を教へるだけの科目で

ある三考へられがちだつた「ヨミカタ」教育は、かくして極めてひろく各科目、各教科との關聯のうちに展開せられたのであります。

十

特に「ヨミカタ」教材について注意しなければならぬのは、ここであらういろいろの事項を決して理念的に注入するのではなくして、さういふまでも國語の力を通じて感動的に與へよう工夫してあることであります。すなはち、國語の教材はその表現を離れて成立するものではなく、教材の精神は表現の進展と相俟つて次第に擴充し、浸潤するやうになるのであります。かやうにして『ヨミカタ』の初等科第一、二學年用四卷を通じて、教材のすべてが殆ど網の目の如く、緊密に關聯し結びあつてをります。

先づ「アカイアサヒ」、「ヒノマルノハタ」(卷一)から、「日本ノシルシ」(卷二)、「富士の山」(卷四)へは、國土の誇りが漸層致します。さうしてこれらが「二重橋」(卷三)、「菊の花」(金しくんしやう) (卷四)を中核として、國體の尊嚴を具象化するのであります。

これらと結んで「ハトコイ」を呼び、「コマイヌサン」を呼びかけ、「オミヤノ石ダン」を登り、「オハカサウヂ」を(以上卷二)、「お祭りに参拜し」(卷三)、また「神だな」(卷四)を飾る一聯の教材が、そのままに敬神崇祖の精神を目ざめ

させるものになります。

さうして、祖父の父を見る「ユメ」や、「机こしかけ」の話や(以上卷二)、祖父の語る「川」の話(卷三)が、兒童の生活を過去の傳統に結んで、「シタキリスズメ」や「モモトラウ」や(以上卷一)、「サルトカニ」花サカヂヂイ(以上卷二)の童話から、「うらしま太郎」(卷三)、「早鳥」(羽衣) (以上卷二)の傳説へは歩を進めて、やがて「國引き」(卷三)、「白兔」(卷四)といふやうな神話へつながりを有つて來て、歴史的色彩を次第に濃厚にしてゐます。

併し、第二學年までには、肇國神話は未だ現はれません。兒童心身の發達を十分に見極めることによつて、國體に對する敬虔な心情を啓培しようとする神話の體系は、これを初等科修身とむすび合ふことによつて、初等科國語が、第三學年の前半期にやうやく提出するのであります。明春みなさんの御覽になれる第三學年用の教科用圖書「初等科修身」(初等科國語)を併せて、おひもぎきになれば、神話といふものをさんな形で、兒童教育に、ないしは幼兒の教育に於て、取扱ふべきかは御分りになることと存じます。

歴史解釋と積極的につながるのではなくして、以上に指摘しましたやうな「國引き」が、或は「白兔」(いふやうなものだけが、低學年の方にまはしてあることからも、簡単に取扱はれ得ないものであることは、御想像になれるのであ

りませう。

とにかく、かかるものなかに日本の國土の美しさをたへて、そこから文學を育てることも、また自然教材を通して地理を理科を育てようとする教材選擇が行はれたのであります。さうして子ごもたちは、「ユフヤケコヤケ」を歌ひ、「カクレンボスルモノ」を叫び、「ココハドコノホソミチダ」に遊び暮し(以上卷一)、「ねんねんころりよ」(卷二)の歌に夜の夢を結ぶ古謠の魅力に、すくすく生育されるのであります。

私共の尊い國がら、美しい國土の四面はまた海であります。「イケニフネ」を浮かべ、「日本ハウミノクニ」をたへ(以上卷二)、「山ノ上」はるかに海を眺め(卷二)、遂に「海」へ来て、その躍動するすばらしいすがたに驚喜致します(卷三)。この海を超えて「ラジオノコトバ」が世界にひろがり、「西ハタヤケ」の滿洲をしのび(以上卷二)、「滿洲の冬」を眺め、「金の牛」の物語を聞き、「支那の子ごも」(以上卷四)を讀んで東西新秩序建設のすがたをまざまざ見るのであります。

そこで子ごもたちは「ラジオ體操」をし、「校庭の遊戲」をし、「ヘイタイサン」の畫をかき、「キチツケ」の號令で兵隊ごっこをし(以上卷一)、「兵タイゴッコ」の劇を演じ(卷二)、「ヒカウキ」(卷一)や「らくかさん」(卷三)に夢中になり、あ

つばれ「軍かん」通になり(卷三)、「こつあほうこつう日」に感激し(卷三)、「海軍のいさん」をよろこび迎へ、「にいさん」の入營を送り、「病院の兵たいさん」を見舞つて(以上卷四)、やがては自分も大君の御楯立ち、科學國防の戰士となり、銃後のまもりをかたくする心構をつくりあげつつあるのであります。

かやうに見て参りますと、「ヨミカタ」教材はそのまま一つ一つが、それぞれの意義と感動とを有するだけでなく、それらのものが相即展開することによつて、いはゆる高度國防國家體系をさながらに具現し、意義と感動をいよいよ深からしめるのであります。このことは『ヨイコドモ』に於て積極的に求めてをります國民的世界觀の確立徹底を圖るさいふごごご相呼應して、國民科的性格のうちにむしろ體的なつてゐるさいふごごごができます。隨つて指導に當つては、この點を十分にわきまへて、徒に一教材にさごこもるごごごによつて抽象的な概念を抽入するのではなく、つねに全般の教材を見通すごごごによつて、表現の具體に即し、連絡の絲をたざりつつ、取扱ふごごごが要求されるのであります。

もごもご子ごもさいふものは、自由奔放な空想性を有するものであります。時には、極めて非合理的なものであつて、或る意味ではそれが一種のうそになつたり、また誤り

になつたりすることがありますが、しかし子ぎもの示す空想性が、一方で創造、發明の基礎たり得ることを、見逃してはなりません。随つて將來日本の動向に於て、創造力の豊かな、優秀な國民をつくるさいふこぎが、留意さるべきである限り、幼い時に於て、たくましい想像力、奔放な空想力をも十分に伸ばしてやるさいふこぎが、大切になるのであります。理窟にはしつた、さきに申しました抽象的概念ではなく、また知識の注入ではなくして、空想性も合理性との統一から新文化をつくりあげて行かなければならない。『ヨミカタ』のなかに在る教材をこの角度から考へて見ることも、重要なことであらうあります。「ワタシガアルク。オツキサマガアルク。」といふやうな教材を、大人の立場に於て、簡単に否定することなく、汽車や電車に乗つたとき、おうちや電信柱がうしろに走つて行くでせう。さいふやうなところから、指導のいさぐちを見つけてごらん下さい。子ぎもの發する「なぜ」の解決を大人化してではなく、兒童に即して求めて行かなければならない。低學年教育では、ひいてはまた幼児の教育に於ては、このことの留意こそ大切なものであります。その意味で、一二學年では童話やお伽噺が多い。しかも三年以上、特に四年以上では組織的に合理的な創造精神に燃えしめるやうな教材が多くなつて、空想も現實との未分化なものが、影をひそめることになる

のであります。

序に申上げるこ、今度の國語の教科書では、

一、新出讀替の文字を兒童用書の欄外に掲げてありません。

二、また、ひらがな初歩の練習を『コトバのオケイコ』といふ『ヨミカタ』に相即して、子ぎもの國語活動をなさしめるため編纂されたものへ譲つてあります。

三、さうして漢字の提出仕方が、子ぎもの器械的記憶力の旺盛な時期に即應させるために、低學年で從來よりも、かなり増加してゐます。

これらの點について詳細なことは、『ヨイコドモ』『ヨミカタ』いづれも、それぞれつくられてある『教師用書』を以て、十分に御検討願ひます。また申し足りないことを補ふ意味では、編纂趣旨について解説したものが、日本放送出版協會から『文部省國民學校教科書編纂趣旨解説』といふ名前で、公刊されてをりますから、興味を多く持たれる方は、その方でお拾ひ下さるやうに希望致します。

十一

最後に、國民科のなかには高學年で、國史も地理も指導されることになつてをります。併し、高學年のものについては、幼児の教育に従事される方々は、恐らく直接的には興味が薄いこと考へますので、簡単に申添へることに

致しませう。

國民科國史の目的は我が國の歴史の概要を兒童に會得させ、皇國の歴史的使命を自覺させようとするところに、在るのであります。國史は決して史實について記憶するといふだけであつてはなりません。確かに編纂せられる國史の教科書のなかには、肇國のいにしへから現代に至るまでのさまざま史實が誌されることでありませう。併し、これをまる暗記しても、それは未だ國史を學んだといふことにはならないのであります。むしろその史實の根柢にひそんでゐる、窮まりなく展開せられ行く皇國の大生命を感得して、皇國臣民としての自覺を深めて、更に世界に於ての我が歴史的使命を遂行するやう、奮ひ立たせるのが、國史指導の窮極の任務になる、といふわけであります。

子どもたちは少しく大きくなつて参りますと、英雄物語とか戦争の話とかが好きになります。例へば、攝政關白になつて、自由自在な權力をふるつた人物について述べますと、その威勢に憧れて、目をかがやかせるであります。併しながら、注意すべきは、如何なる忠良賢哲の事蹟に致しましたも、それが飽くまで國民精神の具體的に現はれたものとして理會させるのでなければ、むしろ有害でさへあるのであります。天皇陛下に對し奉つての隨順奉仕にいくらかでも缺けるところがあつたならば、日本國民として

は少しも畏敬するに足りないといふことを歴史的事實を通して知らせ、皇國臣民として、日本の子どもとして隨ふべき唯一の大道を力づくつかませることが肝腎であります。國史指導が世俗的な講談なき根本に於て相違するわけが、ここから考へられるのであります。

たゞへ武家政治その他の政治體制の變遷について説くことがあるにしましても、いつの世にも一貫して皇威が輝き、國體の本義に於て微動することのなかつた點を十分に明らかにせなければ相成らないのであります。各時代の文化に觸れましても、日本固有の文化の上にたえず外來文化を攝取し、またそれを醇化しつつ、連綿として展開し來つたありさまについて示し、生竊に生々發展する皇國の道を解明すべきであります。また外國との關係について申述べるときにも、我が海外發展の久しき點を説いて、皇國の道に基つて主體的態度の上に生まれる對外精神の所在を示して、國本に培ひ國運隆昌の機運の一日にしてならざることを感得せしめなければならぬのであります。

かくして國史は客觀的に見れば、皇國の大生命の發展史であります。また主體的に探りあげますれば、これ即ち萬民輔翼、臣道實踐のまことを致し來つた跡方でありませう。國史教育はそれ故に、この「臣民の道」を以てしてすべてをつらぬくことの自覺を促すことこそ、大眼目なるのであ

ります。さうしてそれを子ぎもの現實の生活さむするつ
け、臣道實踐の歴史のなかに彼等自身をも現在のこまこ
して完徹せしめなければならぬ。現實さ結ばない國史指
導はおよそ無意味であります。

母の背で、また夜の伽に、をさなごころのうちこに耳にし
得た傳説、神話、英雄物語さいふものが、無垢の童心に培
つて、やがて歴史にあこがれるこまにしむけるものである
こまをよく考へて、幼兒の時代から啓導して行かなければ
なりません。さきに國民科國語の解説のなかに申しました
やうに、「オハカサウヂ」さいふやうな家中そろつて故郷の
お墓参りするこまが、實はそのまに國史指導さなつてゐ
るこまを見落してはならないのであります。國民學校の
四年では、次に説く地理さ結んで、特に「郷土の觀察」の時
間を設けて、郷土の山河のほか、なほ史蹟、社寺、偉人
の生ひ立ちなきに觸れしめるのであります。それ以前に
於て『ヨイコドモ』『ヨミカタ』いづれも、國民の母胎たり得
るやうな教材を提出してゐるこまについて、幼兒教育如何
にすべきかを、考察して頂きたいさ存じます。

皇國の史觀に立つて國民科國史の教科書は編纂されるの
でありますから、これまで史的敘述に多く見受けられたや
うな、個人中心の英雄物語的のものは、國史教科書からは
姿を消すかも知れません。また鎌倉時代さ徳川時代さか

いふやうな時代區分も、すべて武家政治さいふこまを中心
さなしたこまに胚胎してゐるのでありますから、それら
についても再検討せられるこまになりませう。國史教材が
如何なる形で事實の再編成せられるかは、ただいまの所申
しあげかねます。併し、國民的世界觀の確立、國民的自覺
の喚起さいふ根本から歴史を見直すやう心がけて頂きたい
さいふこまだけ、特にくりかへして置きます。

國民科地理に於けるさ同様であつて、ただ自然地理さか
人文地理さかなきを以てして、いはゆる地理學の知識を授
けるのが、主目的では斷じてないのであります。却つて我
が國土國勢ならびに諸外國の情勢についての大要を會得せ
しめ、國土愛護の精神に培ひ、東亞および世界における皇
國の使命を自覺させるこまが大眼目さなつてゐるのであり
ます。

國史、地理をこれまで暗記物さして輕視する傾向があり
ましたが、國民學校では、修身、國語さこまに、國民的自
覺の喚起さいふこまを直接の指導事項さなす國民科さいふ
教科に包含されてゐるこまから、新しい性格を見出さなけ
ればなりません。さきに一寸申しあげましたやうに、この
二科目は四年のこまに「郷土の觀察」さして登場するのであ
りますが、それも全く同一趣旨に出でたものであるこまを、
お考へ願ひたいのであります。

我が國土は東海に浮かぶ大小一萬六千の群島であつて、

北緯一度から五十度に亘つて五萬一千軒、寒溫熱の三帯にまたがつた廣い地域のものであります。しかも燦然たる國史は神様のお生みになつたこの國土の上に展開され、一億の國民はこの國土に於て生々發展して参りました。なほ未來永劫に亘つて、國史の展開を期するためには、よくこの國土についてわきまへ、この國土について知り、この國土を愛護して、この國土のうちに醗酵した國民精神をおのがものさしなればならないのであります。私共はよくいはれるやうに「自然を征服する」さういふのではなく、却つて「自然さうもに生きる」「さういふ態度を以てして昭和の聖代に至つたのであります。自然を愛し、自然さ一體さなつて生々發展する。この角度のものこそ、まさに我が國土を深く愛養し、國土を永劫に亘つてまもり続け、東亞および世界にむかつて、敢然さ皇國の道義的使命を遂行する根據さなるものであります。國民科地理の指導に在つては、その故に知識を現實に生かさうころから始めて、「郷土の觀察」を理數科に於ける「自然の觀察」に引續くものさして提出し、子さの生活を豊富ならしめるさうに資しようさしてをります。ここでも要は實踐であり、實地の指導であります。實踐行爲さういふさうが大本になつて、始めて國體の精華を發揮するさういふさうも、可能的になるからであります。

十二、結び

我國はいまや國を擧げて、神武天皇が皇祖の神意を繼承し給うて國の基を定め給うたをり、昭示し給へる「八紘爲宇」の大理想にむかつて邁進しつゝあるのであります。ここで申します八紘さは、今日のさうばでいへば世界のさうこさであります。既に滿洲事變に際しては、既に滿洲國の建國を見、日滿一徳の盟をなすさうこさによつて、東亞の一角から世界新秩序の建設さ呼ばれる世界史創造の第一歩を印するさうこさのであります。このものさうこそ、ほかならぬ大義を八紘に顯揚する皇國世界觀のあらはれであつた、さうし得るであります。

現實の事態に即して、私共はかやうなものを認識するのであります。實に時さ處さを得て、それぞれに生々發展せしめる皇國の歩みさうこそ、そのままに過去さ未來さをつらぬく不易の國民的世界觀を結果するものであるさうこさにも、またさうした世界觀の具現するさうころ、すなはち政治の理念さなり、また教育の理念さなるのでなければなりません。

私共は皇國の世界觀に、いふさうころの皇國の道に和合するものさして個々の人生を意義づけるさうころに、日本人さしての人生觀ないしは人間觀を所有するのであります。しかもかかる見方、考へ方のほかに、我々日本人のさうるべきものは、なにも存在し得ないのであります。

國民教育といふことについて考へを及ぼす場合に、さうしたものは異つて、人間一般ないしは世界一般を立て、そこから日本國民ないしは日本國家を區別して考へるやうな考へ方を改むべきことは、申しあげざるまでもありますまい。私共は聖訓を無視し、また二千六百有餘年の歴史的現實から眼を閉ぢるやうなことがあつてはならない。特に東亞永遠の安定を御軫念遊ばす御詔勅、ならびに炳々して輝く國體を無視せんとする方向へ走るべきが、あつてはならないのであります。皇國日本を抹殺するやうな學理を立てて、そこから國民精神を涵養するとか、國民的自覺を喚起するさかいつても、それは凡そ無意味であります。國民教育に於ける焦點は文化的教養を與へることよりも、より多く國民的鍊成をするといふところに在り、また個性的開發をするといふよりも、更に根本的に國體にもつぎ皇國の道に則りての修練をするといふ處に在るのであります。

國民學校教育に於ける國民科といふ教科こそは、この確乎不動の方向にむかつて、極めて大切な礎石を置かうとするものであります。その根本的意義については、私は教學局から出ました『教學新書』中の『國民學校精神』といふ小冊子で詳述してをりますから、ここでは控へて、大體以上のやうな解説を以て、責をふさぐことにさせて頂きたいと存じます。

來年の「幼兒の教育」

本誌は、時局下幼兒教育の重要性の増大に基き、内容を一層充實して、斯界の爲にお役に立ちたいものと、平生から念願してゐますが、特に來年號から、記事の刷新を圖り、諸賢の愛讀に報いたいと企て、居ます。

先づ、立教大學教授、愛育研究所員牛島義三氏の「幼兒の心理學」と東京女子高等師範學校教授石井庄司氏の「萬葉に於て日本の感情を見る」を每號連載、堀七藏氏の國民學校理科の實際を續載、之れに月々の保育實際に關する指導的記事として、倉橋主幹、及川主任始め編輯部總動員で、それらの擔當を執筆し、保育講習録の態を以て、保姆諸君必須のものたるを期して居ます。是等特別記事の外に、各方面の利益と興味とを、諸家の執筆に乞ふは素よりでありまして、貴重なる用紙の配給を、苟も無意義ならしめることのないやう、臨戰新體制下の月刊誌たる面目を完ふしたいと力めます。會員諸君は愈々本誌を御愛讀下さると共に、廣く愛讀の誌友を御勧誘下さるやう、併せてお願い致します。

十二月

日本幼稚園協會